

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20H03967

研究課題名(和文)日本人に不足するヘルスリテラシーを前提から支える意思決定スキル学習コンテンツ開発

研究課題名(英文) Development of content for learning decision-making skills to address the lack of health literacy among the Japanese based on this premise

研究代表者

中山 和弘 (Kazuhiro, NAKAYAMA)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：50222170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本課題はヘルスリテラシーに困難のある日本人において、ヘルスリテラシーの前提となる情報評価と意思決定スキルを学ぶコンテンツを開発することを目的とした。本研究の結果、日本の一般成人では情報評価及び意思決定スキルが、思春期の子どもでは意思決定スキルが、ヘルスリテラシーと有意に関連していた。成人では、情報評価と意思決定の両スキルにおいて、約半数がこれまで学習機会を得ていなかった。いずれのスキルも、小学校または中学校で学び、さらに高等学校でも学ぶことでスキルが向上する可能性が示唆された。そのため、一般の人々が両方のスキルを学習できるよう動画コンテンツを作成し、YouTube等動画共有サイトに公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘルスリテラシーは、健康や医療の情報を入手、理解、評価し、適切な意思決定ができる力であり、健康格差の縮小と患者・市民のエンパワメントに必要である。本研究により、日本の一般成人では情報評価及び意思決定スキルが、思春期の子どもでは意思決定スキルが、ヘルスリテラシーと有意に関連していた。特に一般成人の半数近くがそれらの学習機会を持たないことが確認され、生涯の中でより早い時期から学習機会を得ることの重要性が明らかになった。開発した動画では、各スキルのポイントやプロセスの頭文字を並べた「か・ち・も・な・い(情報評価スキル)」と「(胸に)お・ち・た・か(意思決定スキル)」を通して各スキルを学習できる。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to develop content for learning information-evaluation and learning decision-making skills, which are premises for health literacy, in Japanese people with health literacy difficulties. The results of this study showed that information-evaluation and decision-making skills were significantly associated with health literacy in the general Japanese adult population and decision-making skills in adolescents. Among adults, approximately half had not so far had the opportunity to learn in both information evaluation and decision-making skills. It was suggested that both skills could be improved by learning them in primary or secondary school, and then in further education in upper secondary school. Therefore, video content was created to enable the general public to learn both skills and was made available on video-sharing websites, such as YouTube.

研究分野：看護情報学

キーワード：ヘルスリテラシー エンパワメント 意思決定スキル 情報評価スキル 看護情報学 健康生成論 Sense of coherence

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ヘルスリテラシーの低さによる健康格差

健康や医療の研究が進み、治療や予防の選択肢は増大し、多様で複雑な情報があふれている。このような健康や医療の情報を、収集、理解、評価、活用し、適切な意思決定(複数の選択肢から1つを選ぶこと)ができる能力はヘルスリテラシーと呼ばれる(中山, 2016)。そもそもリテラシーとは、単なる読み書き能力ではなく、社会に参加し、自らの目標を達成し、潜在能力を発展させるために必要な能力(PIAAC, 2013)であり、人間の尊厳を表す。ヘルスリテラシーの代表的理論家 Nutbeam(2000)は、20世紀を代表する教育思想家フレイレのエンパワメントの概念を強調している。それは、ブラジルの貧しい農村の人々が支配者に抑圧され、文字を知らされず、否定的な自己像を植え付けられた「沈黙の文化」の発見から始まった。その打開のため、自分たちが置かれている状況を客観的に自覚し、本来持つ潜在能力を発揮できるように、環境を変える力を支援するものである。この人が持つ潜在能力の支援への着目はナイチンゲールと共通している。

しかし、情報格差は拡大の一途である。米国の全国調査(米国教育省, 2003)では、健康情報を十分に理解できる人は9人に1人で、EUの8か国での調査でも(HLS-EU, 2012)、ヘルスリテラシーに困難があり適切に意思決定できない人は47.6%を占め、これらが健康格差を生み、大きな人権問題であるとされた。

(2) 日本人のヘルスリテラシーは低く将来が危ぶまれる

そこで、EUの尺度 HLS-EU-Q47 の日本語版を作成し、全国調査を実施した(Nakayama et al., 2015)。その結果、ヘルスリテラシーに困難がある割合は85.4%で、EU8か国よりも格段に高かった。50点満点の尺度の平均点で見ると、日本はEUやアジアの国と比べても低かった(図)。差が生じた理由は、情報を収集、理解するまではできても、評価、活用する、すなわち適切に判断して意思決定することが難しいためであった。たとえば、判断するのが「難しい」と回答した割合では、最もヘルスリテラシーの高かったオランダと比較すると、「治療法が複数ある時、それぞれの長所と短所を判断する」が日本70.6%、オランダ30.9%であった。

このためもあってか、『ランセット』日本特集号(2011)では、他の先進国に比べて成人期の死亡率の低下は鈍化し、慢性疾患を適切に管理できている率は低く、喫煙率や自殺率も高く、このままでは危ういと警鐘が鳴らされている。

(3) ヘルスリテラシーとストレス対処力の背景にある意思決定の学習と経験不足

また、ヘルスリテラシーはストレス対処を糧にして成長する力である SOC(Sense of coherence)とも高い相関を示した(中山, 2017)。これらは共にエンパワメントがキーワードでヘルスプロモーションのコア概念になっており、相互に重なりつつ高めあっている能力である可能性が示唆された。そして、研究代表者も参加したSOCの国際比較研究によると、データが入手できたスコットランドとカナダと比較しても有意に低かった(中山, 2017)。SOCは幼少時からの意思決定への参加経験と関連しているため(山崎&戸ヶ里, 2011)、その不足が要因と考えられた。

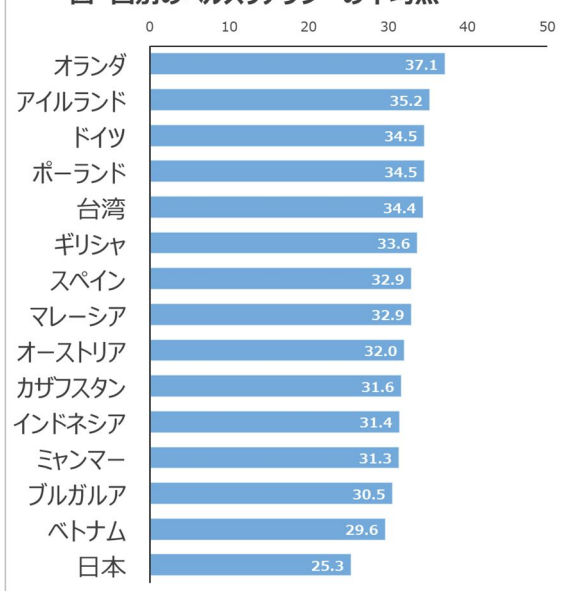
ヘルスリテラシーの高いオランダで高く評され、日本含め世界中に広がっている在宅ケア組織ビュートゾルフの創業者(看護師)の信念は「自分の人生の中で起きるいろいろなことについて自分で判断して決定できれば、自分の人生に自ら影響を与えられるし、より幸せな人生を送ることができる」である。すなわち、意思決定は幸せなことという考え方である。世界の幸福感の調査によれば、人生の選択の自由度が高い国ほど幸福感が高い傾向にあり、オランダはいずれも世界の上位なのに対し、日本の幸福感は先進国では低めで、人生の選択の自由度は57か国中最下位である(世界価値観調査、2010-2014)。オランダは幼少時からの意思決定を重視する個別教育で知られているが、日本では、ようやく新しい学習指導要領で課題の解決のための意思決定の力が盛り込まれたばかりである。

日本にも「沈黙の文化」の存在が危惧される。生まれ持った潜在能力を生かせるよう、人生や生活を自ら決められるようにする、言い換えれば、本当の自分を生きられるための支援が求められる。

2. 研究の目的

ヘルスリテラシーにおいて、判断し意思決定することに困難のある日本人において、ヘルスリ

図 国別のヘルスリテラシーの平均点



テラシーの前提となる情報評価と意思決定スキルを学ぶモデルを開発することである。日本人は学校教育や生涯教育において、自分で判断して意思決定できることが幸せであるということを学習する機会に恵まれていない。

3. 研究の方法

(1) ヘルスリテラシーと情報評価と意思決定スキルとの関連

ヘルスリテラシーと情報評価と意思決定スキルの関連を明らかにするために、3つの調査を実施した。対象は、1)調査会社にモニター登録している全国の一般住民4,000名(性年齢地域別分布は国勢調査の人口構成割合に合わせる)、2)子どもの頃からの状況を知るための高校生500名、3)多様な患者が集まり、進行役も患者で、病氣と折り合いをつけながら楽しく生活する方法を考えるもので、教育的な介入では世界で最も普及している慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)の全国の参加者200名であった。

(2) 情報評価と意思決定スキルの学習ツール開発

上記の調査によってヘルスリテラシーに必要な情報評価と意思決定スキルを明らかにし、それに沿った内容で、学習できるツール(動画)を開発した。

(3) 学習ツール普及のための学習機会との関連調査

ヘルスリテラシー向上を目的とした学習機会の普及に向け、構成する要素である情報評価と意思決定スキルについて、これまでどこで学んだことがある人が高いスキルを有しているのかを明らかにするため、全国の20~60代の一般住民を対象に、各スキル1,000名に対し、自記式のインターネット調査を実施した。

4. 研究成果

(1) ヘルスリテラシーと情報評価と意思決定スキルとの関連

1) 一般住民を対象とした質問紙調査

調査会社にモニター登録している全国の男女20~69歳の一般住民4,000名(国勢調査の人口構成割合に合わせた)を対象に、Webにて質問紙調査を実施した。本調査は、調査会社に登録しているモニターを対象に実施するため、調査会社へ依頼しリクルートを行った。ヘルスリテラシーの測定には、研究代表者らが開発したEuropean Health Literacy Survey Questionnaire日本語版(J-HLS-EU-Q47)を、SOCは13項目短縮版SOCスケール日本語版を使用した。情報評価スキルは、国際的に用いられている情報の信頼性の評価基準(CRAP、CRAAP、AAOCCなど)から、情報の内容の質や信頼性について評価する項目を作成した。意思決定スキルは、合理的な意思決定のプロセスで重要とされている要素を吟味し、選択肢、長所、短所、価値観の各側面について作成した。両スキル共に、日頃の程度実践しているかを問い、合計得点が高いほどスキルが高いことを示す。基本属性や健康指標(主観的健康やメンタルヘルス)と共に多変量解析にて分析を行った。

結果、情報の信頼性の評価、意思決定プロセスの評価の実践について「いつも」「よく」と答えた人の割合はいずれも半数以下であった。情報評価と意思決定プロセスは、いずれもヘルスリテラシーと有意に相関していた(Nakayama et al., 2022)。また、COVID-19の予防行動は、ヘルスリテラシー、情報評価、意思決定プロセスと有意に関連し、COVID-19の予防行動には包括的なヘルスリテラシーが必要であり、様々な情報を評価し、適切な判断をするスキルも重要であることが明らかになった。しかし、これらのスキルを学ぶ機会について、学ぶ機会がない人が4割以上、機会がある人は学校や職場ではなく、インターネットやテレビなどのメディアを通じて学んでいることが明らかになり、今後これらのスキルを身に付ける機会をいつでも利用できるようにすることが重要である。

2) 思春期の子どもを対象とした質問紙調査

思春期の子どもを対象とした調査を実施するにあたり、国内外の子どもを対象とした包括的なヘルスリテラシー尺度の、日本における利用可能性の検討(文献レビュー)、思春期の子どものヘルスリテラシーの現状と課題、ヘルスリテラシーに影響を及ぼす要因を明らかにする、養護教諭を対象としたインタビュー調査、思春期のヘルスリテラシー尺度及び意思決定への参加感覚(意思決定への支援)尺度の翻訳を行い、思春期の子どもを対象とした質問紙調査を実施した。

国内外の子どもを対象とした包括的なヘルスリテラシー尺度の、日本における利用可能性の検討(文献レビュー)(萩原, 2023)

ヘルスリテラシーは時代と共に変遷し、それぞれの定義に対し尺度が開発された。そのため、子どもを対象としたヘルスリテラシー測定尺度も国内外で複数開発されているが、ヘルスリテラシーの能力としても、利用する場面としても、包括的なヘルスリテラシー尺度が整理されていなかった。そのため、文献レビューにより既に開発された国内外の子どもを対象とした包括的なヘルスリテラシー尺度の、日本における利用可能性について検討した。結果、国内外において複数の尺度が開発され、構成要素や保健教育内容、評価方法が尺度により異なった。9歳以上の小学生の場合HLS-Child-Q15、14歳以上の中学・高校生の場合MOHLAA-Qが候補に挙げられるが、他尺度の構成要素や保健教育内容の特性を踏まえ、尺度を選択することが求められた。

養護教諭を対象としたインタビュー調査

思春期の子どものヘルスリテラシーの現状と課題、ヘルスリテラシーに影響を及ぼす要因を

明らかにすることを目的に、養護教諭を対象としたインタビュー調査を実施した。関東圏内の私立高等学校または私立中学高等学校一貫校に勤務する、養護教諭経験が3年以上の、研究に同意の得られた養護教諭5名を対象とした。

結果、養護教諭から見た高校生のヘルスリテラシーの現状及び課題については、198のコードから、63のサブカテゴリーと26のカテゴリーが抽出され、【入手】、【理解】、【評価】、【活用】、【知識】、【基本的なスキル】、【思考力】、【コミュニケーション】、【ナビゲーションスキル】、【認識】、【自己認識・内省】、【自己制御】、【関心】の、13のコアカテゴリーが生成された。Bröder et al. (2017)のシステムティックレビューによって明らかになった子どものヘルスリテラシーの構成要素の内、市民権、自己効力感を除く12の要素が重なっていた。12の構成要素が重複していたが、その多くの構成要素について養護教諭は「個人差がある」または「できない」と語った。「個人差がある」ということは、その内容ができる高校生がいることを示す一方、できない高校生がいることも示しており、ヘルスリテラシーの多くの要素において課題があった。

また、ヘルスリテラシーに影響を及ぼす要因については、45のコードから、38のサブカテゴリーと19のカテゴリーが抽出され、【意思決定】、【Social Agent】、【生活習慣】、【家族状況】、【環境】、【教育】の、6のコアカテゴリーが生成された。この内、既存の研究において関連が明らかになっていなく、教育等の介入ができる糸口として【意思決定】を調査項目として取り上げることを確認した。

思春期のヘルスリテラシー尺度及び意思決定への参加感覚(意思決定への支援)尺度の翻訳

尺度翻訳ガイドライン(Beaton et al., 2000)に基づき、思春期のヘルスリテラシー尺度 Measurement Health Literacy Among Adolescents-Questionnaire(MOHLAA-Q)(ドイツ語版)(Domanska et al., 2020)と、子どもと若者の意思決定への参加に関する質問票 the Child and Adolescent Participation in Decision Making Questionnaire(CAP-DMQ)(英語版)(O'Hare et al., 2016)の翻訳を行った。尺度翻訳ガイドラインは6段階に分かれており、まず日本語を母国語とする2名の翻訳者が原文を日本語にそれぞれ訳し(第1段階)、2つの翻訳結果を確認し、保健医療分野の研究者で話し合いを行い、結果を1つにまとめた(第2段階)。ヘルスリテラシー尺度はドイツ語で作成されていたため、ドイツの保健医療に詳しい公衆衛生の専門家に協力を依頼した。次に、第2段階で統合したものを別々に2名の翻訳者が英語またはドイツ語へ逆翻訳した(第3段階)。再度、保健医療分野の研究者らにより、第1段階から第3段階の順翻訳と逆翻訳内容を共有し、和訳の適切性とわかりやすさを検討し、暫定版を作成した(第4段階)。そして、5段階目に、尺度の対象者である高校生に言語的妥当性の評価として質問紙調査を行い、最後研究者らによって最終版の協議を行った。第5段階で実施した、日本語版(暫定版)尺度の言語的妥当性(表現のわかりやすさ)の評価は、尺度の対象者である高校生を対象とした自記式質問紙調査を実施し、Web調査にて16名の高校生より回答を得た。わかりにくいと指摘された項目について検討を行ったが修正不要と判断した。最終版の協議において、表現方法や選択肢について一部修正を行い、最終版を確定した。

思春期の子どもを対象とした質問紙調査

健康生成モデルに基づき、思春期の意思決定とヘルスリテラシー及びSOCの関連を明らかにするため、仮説モデルを生成し検証した。意思決定として、意思決定スキル(Nakayama, 2022)、意思決定への支援、小学生時の意思決定の経験を取り上げた。日本語へ翻訳した、思春期のヘルスリテラシー尺度(MOHLAA-Q)及び、子どもと若者の意思決定への支援(参加感覚)に関する質問票(CAP-DMQ)の信頼性及び妥当性を検証した。関東圏の高校生を対象に、Webを用いた無記名質問紙調査を行った。高校の保健体育科教諭または養護教諭より周知を行い、Webサイトにて匿名で回答を得た。研究デザインはHL及びSOC、その形成要因である意思決定の関連検証研究だった。目的変数は、MOHLAA-Q日本語版で測定するヘルスリテラシー及びSOCとし、説明変数は、CAP-DMQ日本語版で測定する意思決定への支援、小学生時の意思決定の経験、意思決定スキルとして、質問紙を作成した。翻訳を行ったMOHLAA-Q及びCAP-DMQの信頼性及び妥当性を検証した後、仮説モデルの検証は主に共分散構造分析にて変数間の関係や影響の大きさを検討した。本研究は聖路加国際大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果、思春期のヘルスリテラシーの形成には、意思決定への支援を強化し、小学生時から意思決定の経験を増やし、合理的意思決定スキルを向上させることが重要であること、SOCの形成には、ヘルスリテラシーを向上させること、子どもの意思決定への支援を強化することが重要であることが明らかになった。

3)慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)の全国の参加者を対象とした調査

意思決定スキルを学ぶ既存の介入として、慢性疾患セルフマネジメントプログラム(CDSMP)の参加者におけるヘルスリテラシーや意思決定スキルの変化を検討するため、調査を継続して行った。調査はCDSMPの受講開始前、受講3ヶ月後、6ヶ月後の3時点でを行い、ヘルスリテラシーを主要評価項目、熟慮型の意思決定の程度(意思決定行為尺度(Radford et al., 1989)の熟慮サブスケール)、意思決定時の行動(4項目)を副次的評価項目とした。

2024年度までに参加者142名から回答が得られ、そのうち、慢性疾患をもつ患者113名のデータを解析した。解析対象者のうち、受講3ヶ月後の回答が得られたのは67名、受講6ヶ月後の回答が得られたのは62名であった。対象者の平均年齢は50.7歳(標準偏差12.1)、男性が30名(26.5%)、大卒以上が55名(48.7%)、既婚者が69名(61.1%)、収入を伴う仕事をしている者は53名(46.9%)であった。ヘルスリテラシーは受講3ヶ月後、6ヶ月後に小程度の効果量の改善が

みられた(順に Hedges' $g=0.195, 0.165$)が、統計的に有意ではなかった。熟慮型の意味決定の程度は受講 3 ヶ月後、6 ヶ月後までに小～中程度の効果量の向上(順に $g=0.144, 0.273$)がみられ、6 ヶ月後においては有意であった($P=0.033$)。意思決定時の行動については、有意な変化はみられなかった。

(2) 情報評価スキルと意思決定スキルの学習ツール開発

情報評価スキルと意思決定スキルの学習ツールとして、動画を作成し、YouTube (<https://youtube.com/@healthliteracy-skills>) や TikTok (<https://www.tiktok.com/@healthliteracy>) にて公開した。情報評価スキルについては、国際的に用いられている情報の信頼性の評価基準(CRAP、CRAAP、AAOCC など)から、その頭文字を並べた「か・ち・も・な・い」という5つのポイントを説明する動画を作成した。頭文字はそれぞれ「か：書いたのは誰か」、「ち：違う情報と比べたか」、「も：元ネタ(根拠)は何か」、「な：何のための情報か」、「い：いつの情報か」から構成されている。情報は5つを確認しないと『かち(価値)もない』と覚えやすくなっている。

意思決定スキルについては、選択肢、長所、短所、価値観の各側面について作成した。「お：選択肢 = オプション」は選べる選択肢がすべてそろっているか確認する、「ち：長所」は各選択肢の長所を知る、「た：短所」は各選択肢の短所を知る、「か：価値観」は各選択肢の長所と短所を比較して、自分にとって何が重要かはっきりさせる、という情報に基づく意思決定の4つのプロセスを表している。頭文字を並べると「お・ち・た・か」となり、納得したことを「胸(または腹)におちた」というので、「胸に『お・ち・た・か』」と覚えやすいポイントになっている。

作成した動画では、信頼できる情報としてのエビデンスと信頼性の確認方法「か・ち・も・な・い」と自分らしい意思決定の方法「お・ち・た・か」を学習できる。

(3) 学習ツール普及のための学習機会との関連調査

ヘルスリテラシー向上のための学習機会の普及に向け、ヘルスリテラシーを構成する要素である情報評価スキルと意思決定スキルについて、これまでどこで学んだことがある人が高いスキルを有しているかを明らかにするため、全国の20～69歳の一般市民を対象にWeb調査を実施した。

情報評価スキルについての調査では、947名の有効回答を分析した結果、情報評価スキルについてこれまで学んだことがある人は約半数にとどまり、学習機会が広く普及していないことが改めて示唆された。学習機会との関連としては、特に学校や職場で学習機会を得ていた人に情報評価スキルが高い傾向がみられた。今後、情報評価スキルについて学びたいと思っている人の割合は全体の約6割であり、生涯を通して学習できる環境を整備することが望まれている。

意思決定スキルについての調査では、一般市民1088名の有効回答を分析した。結果、意思決定スキルは回答者の半数近くが学習機会を持たないことが確認され、また、健康関連の意思決定スキルは、意思決定スキル($r=.52$)および、ヘルスリテラシー($r=.30$)と正の相関がみられた。今後の一般市民におけるヘルスリテラシー向上にむけては、ヘルスリテラシーと関連が示されている意思決定スキルに加え、健康関連の意思決定スキルにも焦点を当て、また、学校、職場、個人、地域の対象と場の特性にも応じて介入する必要性を示した。

いずれのスキルも、小学校または中学校で学び、さらに高等学校でも学ぶことで向上する可能性が示唆された。

[引用文献]

- 萩原加奈子. (2023). 子どもを対象としたヘルスリテラシー尺度の日本における利用可能性 - 構成要素及び保健教育内容に着目した文献レビュー -. 学校保健研究, 64(4), 313-321.
- Nakayama, K., Osaka, W., Togari, T., Ishikawa, H., Yonekura, Y., Sekido, A., & Matsumoto, M. (2015). Comprehensive health literacy in japan is lower than in europe: A validated japanese-language assessment of health literacy. BMC Public Health, 15, 505-x. doi:10.1186/s12889-015-1835-x
- Nakayama, K., Yonekura, Y., Danya, H., & Hagiwara, K. (2022). Associations between health literacy and information-evaluation and decision-making skills in japanese adults. BMC Public Health, 22(1), 1-1473. doi:10.1186/s12889-022-13892-5
- 中山和弘. (2016). ヘルスリテラシーとは. (福田洋, 江口泰正編), 健康教育の新しいキーワード(pp. 1-22). 東京: 大修館書店.
- 中山和弘. (2017). 第7章ヘルスリテラシーとSOC. 山崎喜比古(監), 戸ヶ里泰典(編), 健康生成力SOCと人生・社会: 全国代表サンプル調査と分析(pp.141-154). 有信堂高文社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Nakayama Kazuhiro, Yonekura Yuki, Danya Hitomi, Hagiwara Kanako	4. 巻 22
2. 論文標題 Associations between health literacy and information-evaluation and decision-making skills in Japanese adults	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Public Health	6. 最初と最後の頁 1473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12889-022-13892-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉池信男, 川井正信, 井ノ口美香子, 堤ちはる, 猪股弘明, 杉山彰英, 尾藤祐子, 中山和弘, 位田忍, 永田智, 水野克己, 清水俊明	4. 巻 127
2. 論文標題 小児科外来における母親への栄養・食生活支援に関する多施設観察研究：ヘルスリテラシーに着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本小児科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 96-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Son Daisuke, Ishikawa Hirono, Yonekura Yuki, Nakayama Kazuhiro	4. 巻 14
2. 論文標題 The process of Transformative Learning in Dialog Cafe; with Health Professionals and Citizens/Patients	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Primary Care & Community Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/21501319231164302	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中山 和弘	4. 巻 30
2. 論文標題 健康の社会的決定要因としてのヘルスリテラシー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本健康教育学会誌	6. 最初と最後の頁 172～180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11260/kenkokyoiku.30.172	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 45
2. 論文標題 看護学における多変量解析による現象の解明へのアプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 434
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 73
2. 論文標題 【働く人のヘルスリテラシーを高める】患者の意思決定とヘルスリテラシーを高める産業保健職のコミュニケーション	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安全と健康	6. 最初と最後の頁 756 ~ 760
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 45
2. 論文標題 医療者に必要なヘルスリテラシー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本脳神経看護研究学会誌	6. 最初と最後の頁 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 72
2. 論文標題 【ヘルスリテラシーと医療情報】インフォプロのためのヘルスリテラシー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報の科学と技術	6. 最初と最後の頁 122 ~ 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 41
2. 論文標題 教育講演(1)情報評価と意思決定のスキルとヘルスリテラシー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakayama Kazuhiro, Yonekura Yuki, Danya Hitomi, Hagiwara Kanako	4. 巻 6
2. 論文標題 COVID-19 Preventive Behaviors and Health Literacy, Information Evaluation, and Decision-making Skills in Japanese Adults: Cross-sectional Survey Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JMIR Formative Research	6. 最初と最後の頁 e34966 ~ e34966
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2196/34966	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 MAIE Azumi, KANEKUNI Sachiyo, YONEKURA Yuki, NAKAYAMA Kazuhiro, SAKAI Rieko	4. 巻 48
2. 論文標題 Evaluating short versions of the European Health Literacy Survey Questionnaire (HLS-EU-Q47) for health checkups	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Health Evaluation and Promotion	6. 最初と最後の頁 351 ~ 358
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7143/jhep.2020-28	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 27
2. 論文標題 【産業保健活動における健康教育】ヘルスリテラシーの向上には何が必要か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 産業保健21	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山 和弘	4. 巻 25
2. 論文標題 意思決定と健康とWell-being	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聖路加看護学会誌 = Journal of St. Luke 's Society for Nursing Research	6. 最初と最後の頁 38 ~ 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34414/00016549	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 -
2. 論文標題 ヘルスリテラシーをめぐる日本の状況とコロナ禍における必要性 (特集 健康でありたいという願いにより そって)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活協同組合研究	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Danya Hitomi, Yonekura Yuki, Nakayama Kazuhiro	4. 巻 8
2. 論文標題 Effects of graphic presentation on understanding medical risks and benefits among Japanese adults	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cogent Medicine	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/2331205X.2021.1907894	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋恵子, 佐藤晋巨, 松本直子, 中村めぐみ, 朝川久美子, 有森直子, 中山和弘	4. 巻 7
2. 論文標題 一般市民のヘルスリテラシー向上をめざす参加型プログラムの有用性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 聖路加国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34414/00016393	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Azumi Maie, Sachiyo Kanekuni, Yuki Yonekura, Kazuhiro Nakayama, Rieko Sakai	4. 巻 -
2. 論文標題 Evaluating short versions of the European Health Literacy Survey Questionnaire (HLS-EU-Q47) for health checkups	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Health Evaluation and Promotion	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7143/jhep.2020-28	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 53
2. 論文標題 COVID-19とヘルスリテラシー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 450-457
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201811	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 24
2. 論文標題 インフォデミックの治療法としてのヘルスリテラシー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本看護教諭教育学会誌	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山和弘	4. 巻 63
2. 論文標題 ヘルスリテラシー = 「健康を決める力」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本栄養士会雑誌	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 がん医療に必要なヘルスリテラシー
3. 学会等名 第37回日本がん看護学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 看護学における多変量解析による現象の解明へのアプローチ
3. 学会等名 日本看護研究学会第48回学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 情報評価と意思決定のスキルとヘルスリテラシー
3. 学会等名 第41回日本思春期学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 医療者に必要なヘルスリテラシー
3. 学会等名 第49回日本脳神経看護研究学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 抽象概念を測る
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシー、情報の信頼性の確認と合理的な意思決定のスキル、Covid-19の予防行動
3. 学会等名 日本健康学会第86回総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 意思決定と健康とWell-being
3. 学会等名 第26回聖路加看護学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーとは何か
3. 学会等名 第1回ヘルスリテラシー学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーと意思決定支援
3. 学会等名 第33回岩手公衆衛生学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北奈央子, 中山和弘, 米倉佑貴
2. 発表標題 ヘルスリテラシーの視点でみる女性の健康を扱う女性による主体的な活動への参加の変化
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田口良子, 齊藤光江, 中山和弘
2. 発表標題 ヘルスリテラシーががん検診の選好の構造に及ぼす影響に関する一考察
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井徹也, 山口直己, 篠崎恵美子, 栗田愛, 長谷川小眞子, 箕浦哲嗣, 佐藤美紀, 西尾亜理砂, 中山和弘
2. 発表標題 訪問看護師のための事例演習を取り入れたフィジカルアセスメント研修の検討
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 中山 和弘	4. 発行年 2022年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 240
3. 書名 これからのヘルスリテラシー 健康を決める力	

1. 著者名 吉田 千文, 志田 京子, 手島 恵, 武村 雪絵(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 看護管理 第5版	

1. 著者名 松浦 賢長, 小林 廉毅, 苅田 香苗(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 160
3. 書名 コンパクト公衆衛生学 第7版(第8章 社会経済的要因と健康)	

1. 著者名 渡邊正樹 他(編)(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 230
3. 書名 新高等保健体育	

1. 著者名 中山和弘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 384
3. 書名 看護情報学 第3版	

1. 著者名 武田裕子, 大滝純司(編)(中山和弘 分担執筆)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 メヂカルフレンド社	5. 総ページ数 288
3. 書名 新体系 看護学全書 健康支援と社会保障制度 医療学総論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Health Literacy ヘルスリテラシー 健康を決める力 http://www.healthliteracy.jp/ YouTube ヘルスリテラシー 健康を決める力 https://youtube.com/@healthliteracy-skills TikTok health literacy https://www.tiktok.com/@healthliteracy</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	安酸 史子 (YASUKATA Fumiko) (10254559)	日本赤十字北海道看護大学・看護学部・教授 (30120)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本城 由美 (佐居由美) (HONJO Yumi) (10297070)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	
研究分担者	戸ヶ里 泰典 (TOGAR I Taisuke) (20509525)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	
研究分担者	瀬戸山 陽子 (SETOYAMA Yoko) (20649446)	東京医科大学・医学部・講師 (32645)	
研究分担者	石川 ひろの (ISHIKAWA Hi rono) (40384846)	帝京大学・公私立大学の部局等・教授 (32643)	
研究分担者	米倉 佑貴 (YONEKURA Yuki) (50583845)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	
研究分担者	大坂 和可子 (OSAKA Wakako) (70322344)	慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・准教授 (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関